

人間崇拜の禁止

キプロスから小アジアに渡ったパウロとバルナバの伝道は、ピシディアのアンティオキアからイコニオンへと活発に展開されていった。が、それとともに、彼らの行くところ、また迫害の火の手もあがった。それは彼らの第一の伝道対象としていたユダヤ人同胞から起った。使徒たちへの反対と迫害は厳しかったが、それは彼らの伝道の妨げにはならず、かえって、新しい伝道の道が開かれる機会となった。

追われるようにしてイコニオンを去ったパウロとバルナバは次の伝道地リストラへと向かった。リストラはイコニオンの南南西 20 マイルの地にあり、アンティオキアと同様にローマの植民都市であった。ラテン語を話すローマ人が多数住んでいたが、大部分はルカオニアの地方語を話す土着のアナトリア人であった。この町で一つの出来事が起った。

生まれつき足がきかず、座ったきりで、まったく歩いたこともない不幸な人が、パウロの語る福音を聞いて信じ、その病がいやされて歩き出すという奇蹟が起った。この出来事はリストラの人々の間に一大センセーションを巻き起こした。群衆はパウロのしたことを見て驚嘆し、バルナバをゼウスと呼び、パウロをヘルメスと呼んで、声を張り上げ、ルカオニアの地方語で「神々が人間の姿をとって、わたしたちのところにお降りになったのだ」と叫び続けた。

そればかりではなく、郊外にあるゼウス神殿の祭司が、群衆とともに、二人に犠牲をささげようと思って、雄牛と花輪とを門前に持ってきた。これを見て、パウロとバルナバは、血相を変え、自分の上着を引き裂き、群衆の中に飛び込んで行き、叫んで言った、「皆さん、なぜ、こんな事をするのですか。わたしたちも、あなたがたと同じ人間にすぎません。・・・」。こう言って、二人はやっとのことで、群衆が自分たちに犠牲をささげるのを思いとどませた(14? 18 節)。

「上着を引き裂く」というのは、ユダヤ人の中では、だれかが神の前に、或いは神に対して汚しごとをした時の恐れとおののきを表す動作である(マタイ 26 :65 参照)。自分たちが神々に祭り上げられ、礼拝の対象とされようとしたとき、パウロとバルナバは驚きと恐怖のあまり、群衆の中に飛び込んで行って、それをやめさせようとしたのである。そこに彼らの至高の神への恐れとおののきに満ちた信仰の真実さがよく表されている。

聖書は人間が人間を崇拜することを厳しく禁じている。人間が人間を神とする、或いは一介の被造物にすぎない人間、罪人にすぎない人間が、自分を神と等しいものとする。そして礼拝と服従を要求する、この人間の傲慢！ これは実に恐ろしい罪である。その結果は何であるか。ヒトラーを見よ、スターリンを見よ、戦時中の天皇神化を見よ。その結果は実に悲惨である。

聖書の中の神の僕たちは、礼拝されるべきお方は神のみであるというこの信仰の厳粛さをよく知っていた。それ故、自分が少しでも崇拜されることを戦慄をもって拒絶した(使徒 10 : 26、黙示 19 :10 参照)。私たちは人間を誇ってはならない。人間を崇拜してはならない、神のみに属する栄光を人間に帰してはならない。ただ神のみを神としなければならない。神のみに栄光を帰さなければならないのである。